

## 第20回～22回 富山医科薬科大学医学会学術集会(記録)

第20回 最終講義 昭和63年 6 月18日(水) (第4 回富山医科薬科大学医学会総会に併催)

「二つの天然薬物——EPA ならびに Ginsenoside Rg<sub>1</sub> fraction について——」

附属病院長・副学長 熊 谷 朗  
司会 病態生化学 萩 田 善 一

### 聴講印象記

熊谷先生は、既に1950年代より、和漢薬の一種である甘草の有効成分グリチルリチンの臨床薬理作用の究明に力を注ぎ、その本態は 5 $\beta$ -reductase 阻害効果によるステロイド増強作用であることを発見されました。これは従来の甘草の薬理作用に関する散発的な諸研究の相互間の矛盾点を一挙に整理解明する新知見であるばかりでなく、同時に、コーチゾンの抗肉芽作用、胸腺萎縮作用等に拮抗するグリチルリチンの作用の本態をも明らかにするものであり、グリチルリチンの臨床効果の多相性を明快に説明するとともに、その臨床応用の一大発展を齎す基礎をきずく輝かしい業績でありました。すなわちこれによってグリチルリチン製剤(強力ネオミノファゲンCなど)の薬効を確定し、それがB型肝炎、慢性肝障害等の治療に極めて有効であることを立証することとどまらず、さらに進んでは、極く最近、本剤がエイズウイルス抗体(抗原)陽性者の発病抑止効果を有することについても有望な成績が得られつつあることなど、その応用範囲の拡大はとどまるところがない状況であると申せます。さらにまた、グリチルリチンが抗高脂血、抗動脈硬化作用をもつことについても、既に十数年前より指摘しておられ、今後の我国医療界に課せられた高齢者の老化防止という重要課題への突破口のひとつを示唆された功績も大きいといわねばなりません。

一方、熊谷先生は、グリーンランドエスキモーの種族間に動脈硬化症の寡いことは、彼等が常食として魚類、および魚類を捕食している海獣の肉を摂食することによって、その中に多く含まれるエイコサペンタエン酸を摂る結果、栄養学的、臨床薬理学的に動脈硬化性疾患の発症を免れている結果であろうとする新発想を立てられました。そこで、エイコサペンタエン酸を動脈硬化症の予防、治療のために利

用する研究組織をわが国で初めて組織して活発な研究活動を展開し、多数の大学、および民間研究組織を駆動することによって成果をあげて来られました。すなわち、漁村と農村とにおける食餌中エイコサペンタエン酸含有量の差の疫学的調査からはじめて、当該物質の純品の開発に成功し、さらに進んでそれを用いた動物実験を加えた広汎な研究を推進した結果、エイコサペンタエン酸の臨床薬理作用機序のほぼ全貌を明らかにするとともに、それを用いた動脈硬化性諸疾患の治療に至るまでの包括的臨床研究を推進し、その研究範囲、規模の大きさにおいて、文字通り、世界のエイコサペンタエン酸研究をリードしている第一人者であるといつて過言ではない現況であります。とくにその臨床効果に関する多数の協力研究施設を連ねた共同研究の成果によって閉塞性動脈硬化症の予防に関しては既存のどの薬剤よりも優れた薬効のあることが立証されています。また最近、エイコサペンタエン酸は糖尿病腎症の際にみられる蛋白尿を減少させる効果のあること、さらに動脈硬化性疾患の発症率が非常に高い腎移植後患者に投与することによって、その発症抑制に著効のあることも明らかにするなど、我国においてのみならず、世界各国のエイコサペンタエン酸研究者から激賞されるすぐれた業績を開発中であります。今後我国で、高齢化が益々すすみ、動脈硬化性疾患患者が著しく増加することを考えると、熊谷先生のこのエイコサペンタエン酸にかかわる業績の意義は極めて大きいといわねばならず、今後の一層の発展が期待されるわけであります。

上記の甘草の主成分であるグリチルリチンおよび今回述べられたにんじんの有効成分 ginsenoside といい、またエイコサペンタエン酸といい、それらは人工合成薬品ではなく、いずれも天然に存在する物

質であって、それらが食品、あるいは和漢薬として人体に摂取されるとき、一般の合成化学薬剤にまさるとも劣らぬ有効な臨床薬理作用を発揮する事実の証査を、熊谷 朗先生は、広汎、かつ十分な研究体系を構成する多数の優秀な研究グループを組織化する

ることによって迅速、かつ確実な研究成果をもって次々と世に問い、和漢医薬の分野における富山の声価を世界にかくれなきものとして下さったご功績を、ここにあらためておつたえ申し上げたく存じ拙筆をとらせていただいた次第であります。

医学会集会担当 山本 記

# 第21回 昭和63年 9 月 7 日(水) (富山県医師会、富山県教育委員会、富山県体育協会と併催)

「心臓のメディカルチェックと運動処方」

Florida 大学循環器科教授・運動科学センター所長 Michel Polok

特別発言 第 2 内科 藤 田 正 俊

司会 第 1 外科 山 本 恵 一

## 講演抄録

機械技術の発展と共に、人間は次第に座業的存在に変わってきた。この生活様式の変容は「運動不足病」と呼ばれる、運動不足が直接的間接的にもたらす疾病、例えば冠動脈性心疾患、高血圧、肥満、不安と抑うつ、腰部障害等を生じさせた。この運動不足傾向に対抗するために、一般大衆を規則的運動に参加させるよう仕向ける動機づけや、いろいろな運動の仕方を評価する運動科学の研究に、益々多くの関心

が集められてきた。その結果、個人別運動プログラム処方の概念が生まれ、個人に応じた運動プログラムが各種医学検査や体力測定の結果に基づいて処方されるに至っている。今回は健康人、スポーツマン、冠動脈性心疾患患者等を対象にした数多くの研究成果をもとに非常に緻密な運動定量化とフィード・バック手法による被処方者と管理者のためのモニタリング機構やその成果を紹介した。

# 第22回 シンポジウム 昭和63年12月 3 日(土) (第 5 回富山医科薬科大学医学会総会に併催)

「富山医科薬科大学における臓器移植の現況と将来展望」

司会 泌尿器科 片 山 喬  
第 2 内科 飯 田 博 行

## 第 1 部 「富山医科薬科大学における腎移植」

### 1. 腎移植の臨床成績と泌尿器科的合併症

泌尿器科 古 田 秀 勝  
酒 本 護  
片 山 喬

### 2. 内科からみた腎移植成績

第 2 内科 泉 野 潔  
飯 田 博 行

### 3. 幼小児期の腎移植

小 児 科 樋 口 晃  
岡 田 敏 夫

### 4. 腎移植における組織適合性

輸血部・透析部 西 野 主 真  
森 田 猛  
川 田 やす子  
井 上 恭 一

5. 腎移植における手術部の対応

手術部 佐藤根 敏彦  
伊藤 祐輔

6. 腎移植患者のクリーンルーム入室に関する調査

看護部 村上 佳子

第2部 「富山医科薬科大学における臓器移植の将来を考える」

1. 富山医科薬科大学脳死判定規準案について

脳神経外科 岡 伸夫  
高 久晃

2. フランス等における心臓移植の所見

第1外科 村上 新